



複製／表象としての絵はがき（杭州西湖）

——火野葦平作・中村研一画「花と兵隊」をめぐって

松本 和也

1. はじめに

このところ、杭州西湖の絵はがきを集めている。もとより、絵はがきコレクターというのではなく、個別の興味関心から進めてきた、昭和10年代の文学史、日中戦争の表象、小説の挿絵（文学と美術の関係）といった研究テーマが、最近になって図らずも合流するかのようになり、杭州西湖の絵はがきを目指しているのだ。その多くは、例えば、【図1】のような名所案内内である。

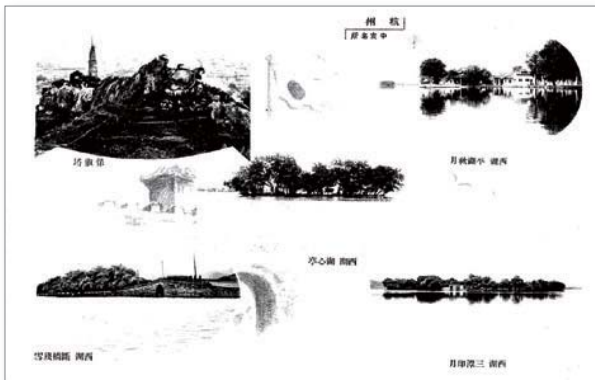


図1：「中支の風光と戦跡 杭州」

幸いなことに、2016年度には、神奈川大学アジア研究センターの予算によって、新たに杭州の絵はがきを購入することができ、目下その整理・分析を進めている。ここでは、その中間報告も兼ねて、研究の来歴と展望を整理しておきたい。

絵はがきを集めはじめた直接の契機となったのは、後述する洋画家・中村研一の発言である。以下、そこに至るまでの道のりを振り返りつつたどってみたい。

2. 絵はがき

近年、絵はがきは研究対象としてとみに注目を集めている。日本での絵はがきブームが、日露戦争を契機としたものであることは多くの書物で指摘されているが、100年以上たった今日、絵はがき研究ブームが訪れているというわけだ。

2000年代以降の主な書物に限っても、富田昭次『絵はがきで見る日本近代』（青弓社、2005）を皮切りに、細馬宏通『絵はがきの時代』（青土社、2006）、橋爪紳也『絵はがき100年 近代日本のビジュアル・メディア』（朝日新聞社、2006）、生田誠編著『100年前

の日本 絵葉書に綴られた風景：明治・大正・昭和』（生活情報センター、2006）などが集中的に刊行されている。いずれも、絵はがきを手がかりに、日本の歴史を振り返るといえるものである。近年も同様の興味関心から、学習院大学史料館編『絵葉書で読み解く大正時代』（彩流社、2012）、生田誠『ロスト・モダン・トウキョウ』（集英社新書ヴィジュアル版、2012）などが、やはり同時期に刊行されている。

こうしたメイン・ストリームとあわせて注目しておきたいのは、近代日本が抱えた植民地、いわゆる“帝国の版図”を対象とした絵はがきをとりあげた書物である。貴志俊彦『満洲国のビジュアル・メディア ポスター・絵はがき・切手』（吉川弘文館、2010）、高橋千晶・前川志織編著『博覧会絵はがきとその時代』（青弓社、2016）、白幡洋三郎・劉建輝編著『異邦から／へのまなざし 見られる日本・見る日本』（思文閣出版、2017）などの出版が相次ぎ、近年の顕著な傾向といえそうである。

もとより、「絵はがきは、もともと大量に流布した「複製芸術」（橋爪紳也）であり、そうである以上、そこに描かれ／映しだされた対象についてのイメージ形成にも関わっていく。その意味で、絵はがきは原理的にそうである以上に、表象の政治学とでも称すべき局面を色濃く孕んだメディアといえようし、こと、対象が植民地や外地であった場合、そうしたウェイトが大きくなるのは必至で、それゆえに重要な研究対象として再発見されつつあるのだ。

別の観点から考えてみても、絵はがきはビジュアル・イメージが刷られた葉書（郵便物）として多彩な相貌をもっており、その意味で、「奇妙なメディア」（細馬宏通）でもある。ジャック・デリダ／若森栄樹・大西雅一郎訳『絵葉書1 ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方』（水声社、2007）では、「前か後ろか、こちらなのかあちらなのか、近くか遠くか、プラトンなのかソクラテスなのか、裏か表かが分からないことだ。どちらが重要なのか、^{イメージ}図像なのかテキストなのか、またテキストのなかでも、メッセージなのか^{レジェンド}説明文なのか、あるいは宛先なのか分からない」ような特質＝雑種性について論及がみ

られる。

こうした多面性に、制作・流通の時期や場所を考えあわせれば、なおさらのこと興味深い研究対象であることは間違いない。

3. 火野葦平・中村研一・「花と兵隊」

さて、日本近代文学を専門とする私の主な研究テーマは、「昭和10年代文学場の多角的な検討」である。問題関心はアジア・太平洋戦争期という歴史的な時期と、文学者・文学活動との切り結びにある。わかりやすい研究対象を例示すれば、戦争文学とその書き手、さらにはその受容ということになる。中でも注目しているのは、当時「戦争文学の最も輝やかしい一つの星」（板垣直子）と称された火野葦平（1907～1960）である。こと、「糞尿譚」による芥川賞受賞第一作にあたる、兵士として書いた「麦と兵隊」（1938）【図2】は、文学シーンを震撼させる話題作となった。



図2：火野葦平『麦と兵隊』

つづく第二作「土と兵隊」も雑誌発表、つづく第三作「花と兵隊」は新聞連載小説（『東京／大阪朝日新聞』夕刊、1938.12～1939.6）である。これら3作品は“戦争三部作”と呼ばれている。前二者は雑誌発表、初出時にも単行本にも現地の写真やスケッチが数葉掲載されはしたが、ビジュアル・イメージが本格的に展開された火野作品は「花と兵隊」をもって嚆矢とする。同作では、新聞連載小説としてすべての回に挿

絵が付されていた。それは、もとより本文と連動することを基本としつつ、本文との関係性において読者の読書行為に関わっていく重要な役割・機能を担っている。

ちなみに、「花と兵隊」の執筆事情や経緯、当時の読者評価、小説に描かれた日本人／中国人、男／女に関わる表象の規則などについては、すでに拙論「火野葦平『花と兵隊』の基礎的検討」（『立教大学日本文学』2017.1）にまとめた。論文末において次の課題として掲げたのは、「国籍／性別を異にする人物が織りなす“交通”の諸局面がどのように書かれたか、言語表現／挿絵の両面から、紙背／作中世界の権力関係に配慮しながら検討していくこと」であった。「花と兵隊」は、日本人／中国人、男／女が、恋愛関係を展開させることになり、現地の風景や戦闘場面の他にも、読むべき／見るべきポイントの多い小説であり、それゆえに、“中国（人）をいかに表象するのか”という、日中戦争開戦以後の難問が立ちはだかつていく。

そうした中で、火野葦平が言葉によって、（小説本文に即しながらも）中村研一が挿絵によって、日本（内地）の新聞読者（層）に向けて、戦場となった中国を表象していくことになったのである。

4. 新聞連載小説における挿絵

前任校（信州大学）の受贈資料に「石井鶴三コレクション」があり、石井鶴三宛書簡を中心として、資料群の整理に関わらせて頂き、今も継続している。版画家・洋画家である石井鶴三は、新聞小説などの挿絵画家としても小さからぬ足跡を残している。挿絵の代表作をあげれば、中里介山「大菩薩峠」、直木三十五「南国太平記」、吉川英治「宮本武蔵」などである。

こうした経緯から、現在、科研費による共同研究「日本近代文学と絵画のジャンル横断的交流に関する総合的研究」に分担研究者として参加している。私は、他のメンバーと鶴三宛書簡の整理を行うとともに、吉川英治作・石井鶴三画「宮本武蔵」と火野葦平作・中村研一画「花と兵隊」とを対象として、小説本文と挿絵の相互作用について検討を進める予定である。

ここで、改めて中村研一（1895～1967）について、簡単にふれておく。福岡県生まれの中村は、1915年上京、東京美術学校に入学。1924年渡仏、1928年帰国。1929年には、中村正奇海軍少将の長女・富子と結婚。

1931年以後帝展、文展各審査員。戦時中は、英領マレー半島北部へ上陸する日本軍をモチーフとした戦争記録画の名作「コタ・バル」(1942)などを描き、陸海軍の従軍画家として活躍した。1950年、日本芸術院会員。もとより、洋画(本画)が本業だが、小島政二郎「海燕」(1932)、山本有三「女の一生」(1932-33)などで挿絵も描いた。「麦と兵隊」以降、原稿依頼の集中した火野の第3作をとった朝日新聞が挿絵画家として配したのが、洋画壇の中堅となった中村研一だった。

『東京／大阪朝日新聞』紙上での「花と兵隊」の言葉／挿絵のコラボレーションについては、今後具体的に討を進めていく予定だが、ここでは絵はがきに関わる局面を少しく紹介しておきたい。

杭州湾警備駐留記であるところの「花と兵隊」は、もとより火野葦平の実体験に即した小説だが、戦闘シーンは少なく、杭州を舞台とした兵隊たちの日々の暮らしや恋愛関係も含めた中国人との関わりが描かれていく。火野自身も「杭州は詩韻馥郁美しい街でした、殊に西湖の美しさは格別でした」と振り返っている。

「花と兵隊」において、初めて西湖が描かれた場面を、以下に引いておこう。

私達は汗に塗れ、肩に喰ひこみ、胸を緊張めつける背囊をはね上げながら杭州入口のなだらな坂を越えた。その途端に、私は、事実、あつとばかりに叫び声を立てて立ち止つてしまつたのである。突然、私達の眼前にきらきらと光りきらめいてゐる。湖の姿が開けた。夕刻に近く、既に重畳した山の彼方に没したばかりの太陽が、さんさんと眩しいばかりの光りを湖上に散らし、山と堤と木々と家と水と島と幻燈のやうな色彩の中にあつた。

カウントの仕方にもよるが、「花と兵隊」139回の連載中、西湖が挿絵として描かれたのは18回(14%)にも及ぶ。それは、さしあたり名所案内といった趣をもつが、描かれたそこが戦場でもあることを想起すれば、この企図-意味作用の捉え方については慎重を期す必要があるだろう。

それはともかく、こうした「花と兵隊」において見所の1つとも位置づけられる西湖を、中村研一はどのように書いたのか。連載後の本人談では、「杭

州を全然しらないのでこの方は友人が貸して呉れた画はがきでゆきました」と述べている。ここで絵はがきなのである。

中村研一の挿絵を彷彿とさせる絵はがきとして、【図3】を紹介しておきたい(絵の右傍キャプションは「楊柳かすむ杭州西湖の日本兵士」)。



図3:「恤兵絵葉書」

最後に、今後想定される課題／困難について述べて、研究展望に変えたい。

杭州には西湖があり、日本でもすでに景勝地として知られていた。それゆえ、絵はがきや写真といった表象によって複製され、流通していく。複製／表象は、それに付されたキャプションや付随するコンテキスト、さらにはそれを受容する側の興味や情報量によって、異なる意味作用をもつだろう。また、「花と兵隊」に即していえば、小説本文は書き手の現地での実体験に即して書いたもので、挿絵は画家が複製に即して内地で描いたものである。

このような、考え出せばいくらかでも出てきそうな、戦時下の西湖／中国表象をめぐる諸条件を、いかにして「花と兵隊」をめぐる問題系へと結びつけていくのか、気が遠くなる思いすらする。もうしばらく、絵はがきを集めながら／その手ざわりを感じながら、地道に思索を深めていきたい。

(外国語学部教授)